

毛糸による描画指導の試み

The Trial of the Drawing Guidance by the Woolen Yarn

富岡卓博**・堀 祥子**・新井 萌***

Takuhiko TOMIOKA, Sachiko HORI and Moe ARAI

キーワード：毛糸絵 刺繍 共同制作 幼児教育 特別支援教育

はじめに

かつて、子どもが粗末な紙の上に毛糸を綴って花の絵を描いた作品(写真1, 写真24)を見たとき、その斬新さに心を打たれた。下地は布地ではなく使い古しの紙で、おそらく戦場下という事情がそのようにさせたことが想像される。絵の具の代用として多色の毛糸で刺繍された線描の絵は、一方で、逆境の中、そうまでして表現しようとする子どもの本来的な姿について考えさせられるものであった。刺繍の盛んな文化圏という環境の影響も大きいことが考えられるものの、紙に毛糸刺繍するという発想そのことにも独自性がある。



ユダヤ収容所に残された女子の毛糸刺繍による作品

写真1 『テレジンの収容所の小さな画家たち詩人たち』より

本論は、そうした毛糸を描画材として使う方法を、今日の日本の子どもたちの造形教材として生かせないかとの発想から実際にいくつか試みたことの報告である。

実践報告する内容は3つで、対象者の年齢と実施時およびねらいも多少異にしている。

・実践1は、幼稚園5歳児を対象にしての共同制作。ねらいは教材開発とともに共同作業の発達状態を調査すること。

・実践2は、再度、別の幼稚園5歳児を対象にした個人制作。ねらいは幼稚園児の造形教材の開発、それに加え、5歳児の課題理解の程度と手の巧緻性の発達調査。

・実践3は、小学校の特別支援学級高学年クラス6人を対象に、個々の特性分析からそれに沿った教材開発。

まず以上の実践事例を報告し、その結果として得られた問題点を明らかにするとともに、今日の子どもたちにとって毛糸を用いた描画方法が造形表現教材として有効であるか否かについて、契機となった前述のユダヤ人女子の作品分析を加え考察する。

I 実践報告1

1 実践の方法と目的

(1) 対象者と指導者および実施時

- ・対象者：岐阜市立大洞幼稚園5歳児年長クラス、男児10名、女子11名 計21名。
- ・指導者：富岡卓博、同園教諭石坂和代
- ・実施期：平成17年1月から3月にかけて。

(2) 実践方法

準備として、毛糸絵の下地布(132cm幅のやや薄めの麻布使用)とそれを張るための木枠(縦125cm、横360cm)。木枠は可動性があり、教室あるいは広い遊戯室に適宜移動して作業をすすめた。

次の写真2のように、脚付き台に固定し、垂直に立てた状態で制作。

その他、準備したもの

- ・毛糸(極太)15色ほど
- ・毛糸用針(金属製7cm長、径2mm。針穴2mm幅)園児数分
- ・手製毛糸通し具 多数

活動の流れ

- ① 園児に毛糸と毛糸針を見せて興味を持たせ

* 岐阜大学教育学部美術教育講座
Department of Art Education

** 岐阜大学大学院教育学研究科美術教育専修

***岐阜大学教育学部美術教育講座

た。続いて毛糸を針に通す道具の毛糸通し具(写真5)の説明と実際に毛糸通しを実演によって示した。

「毛糸でお絵かき」方法についてできるだけ簡単に説明し、あとは実制作をとおして個別指導によって理解をはかることにした。

- ② 各自の絵の具(パス)を使って大きく張られたキャンバス布に直接に好きなものを大きく描くように求めた。
- ③ 自らが描いたパスの線をなぞるように毛糸刺繍をしていった。(写真2)

その際、図1のように大きな麻布をはさんで制作者と突き出されてくる針を突き返す支援者がペアになる必要がでてくる。



写真2 毛糸絵を制作中の5歳児たち

各自がパスやクレヨンで線描した絵の上を、毛糸と毛糸針を使ってステッチしている姿。布の向かい側(裏側)には刺された針を返す役割をする子どもや大人の援助者がいる



図1 毛糸針の刺しあい(筆者作画)

左側の製作者と麻布をへだてて右側に支援者がいて差し出てくる毛糸針を引いては返すことを繰り返す。5歳児同士で協力関係がどこまで発達しているかを観察

実践の目的

- ・教材開発の視点からの目的。
- ・発達段階のとらえとして、5歳児における仲間意識の芽生えとともにどこまで共同作業がで

きるようになってきているかの検証。個人では成しえない創造活動を仲間と共有できる喜びを味わい、協調性や社会性の意識の成長状態を知る装置でもある。2人ペアが成立できるか。特に裏方の役割を理解し協力できる子どもの姿をみることができると、成立の条件の有無も含め観察する。

2 展開の様子



写真3 毛糸絵の制作途中作品

パスで描いた上から、形の輪郭を好みの色でたどっている

何を毛糸で描くか、内容を指導することは大切である。特に共同制作としてはテーマの設定が指導者に求められることがあるが、この時はあえて子ども個々にまかせた。幼稚園卒園を間近にしている子ども興味関心や表現したいことは何かを知る意味で自由画とした。その結果、まとまりという点からくる迫力に欠けるが、一人ひとりの園児がそのとき感心を持っていること、描きたいものを精一杯に表わして残している。園児が共通する関心事として虹、昆虫、魚が何ヶ所にも描かれている。

当初、「園児自らが選ぶ活動」という教育理念から、一斉保育ではなくスタートしたため、参加者がまばらであった。何度も出かけ指導する中で作品つくりの様子が伝わることで加わる園児数が増加していった。最終的にはこの年度の幼稚園の卒園記念作品として全員参加ということになって、園の5歳児全員が自分の絵の作成のために参加することになった。



写真4 毛糸絵を制作中の5歳児たち

夢中になって毛糸刺繡する子やはしゃぐ子
麻布をはさんで裏側には図1のように針が出てくるのを待つ大人や仲間がいて、針を刺し返してくる

5歳児が針を使うことの心配について

・毛糸針は一般の裁縫用針に比べて大きく針先も太いため、突き刺すということの危険を感じさせることは園児の活動中に見られなかった。もちろん使い方と周囲への配慮、置き方、片付け方のルールづくりなど、使用についての安全指導は十分おこなった。

毛糸通しについて

・一度に通す毛糸の長さに決まりはないけれど長すぎると針を通してから引き絞るまで操作が困難になり途中で毛糸のたまり（だま）もできやすい。大体の長さの目安は、園児が手腕をのばした長さと同じおよそ50センチほどと思われる。毛糸通しの理解は当初は少数であった。しかし、そのこと自体もおもしろがる積極的な園児の出現などもあり、できる園児がまだ理解できない園児へ教えた結果次第に誰もができるようになっていった。

・50センチほどの毛糸は作業の早い園児ではたちまち使い切るので頻繁に毛糸通しが行われた。ついでに色糸を変えることにもなり一般の描画より色使いが多色になる傾向が促されたのではないと思われる。

裏方（他者理解と協力する心）について

・本実践の目的のひとつ、5歳児時期の社会性の芽生えの状況を検証することについて、毛糸の針を刺し返す裏方役はそのことにつながると考えたが、当初は2組ほどしか形成されなかった。その分、指導者と園の教諭が裏方役をまかなったので大変な忙しさであった。指導者が楽しさと安全の意味で相手方に針を通すその都度、女言葉風に「いくわよ」といって行った。その様子を見て、参加しなかった園児や裏方役はおもしろくないと思っていた園児への刺激となり次第に裏方を引き受ける園児が出始めるという予想外の効果を生み出した。

実践1のまとめ

5歳児を対象とした毛糸と針を使った教材としての試みは一応の成果がみられた。

・一般の描画材とは違い、こんなものでも絵が表わせるという認識を新たにし、技法の理解とともに次第に意欲的に取り組む園児の姿がみられた。自由参加で始まったが最終的には全員が加わった制作となった（写真21）。

・一枚の画面にみんなで描いた共同制作といいながら、構成上はカタログ的にばらばらの絵の

集合という内容であった。

・この課題の中では、5歳児ではまだ十分に他者への思いやり、自己犠牲の心の形成には遠い位置にあることがわかった。

II 実践報告2

1 実践の方法と目的

(1) 対象者と指導者および実施時

・対象者：本巢市立西幼稚園5歳児年長クラス、男児34名、女児35名 計69名。

- ・指導者：富岡卓博，同園教諭：浅井千代美，鈴木公二
- ・記録・観察者：堀祥子
- ・実施期：平成19年10月

(2) 実践方法

実施園側からの個人作品の制作指導を要望された。このことから、再び毛糸絵をもって今回は個人制作型の指導方法を計画し臨んだ。

主な教材教具

- ・麻布（45cm×45cm） 70枚
- ・支持木枠（30cm×30cm）70組
- ・ロール和紙（30#）幅1m長さ15m
- ・毛糸（極太多色）20ロール
- ・毛糸針 70本
- ・毛糸通し具 40本（写真5参照）

5歳児年長をクラス別（35人2クラス）計70人を一斉指導のため、教材教具を人数準備するのは困難をともなった。特に支持木枠は麻布を挟むための外枠と内枠が必要となる。70組140枠を手作りで作製するため、木材を製材し組み立てた。

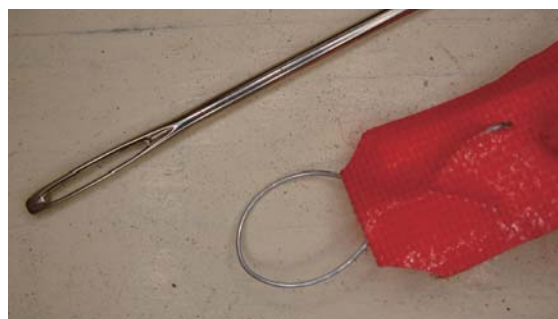


写真5 毛糸針（左）と手製の毛糸通し具（右）

事前の描画指導

園児と初めて接し制作指導を成功を図るため

には園児との意思の疎通をはかることは大切である。また、作画内容にも一步踏み込んで5歳児の表現能力を最大限引き出すために毛糸絵の実践に先駆けて描画指導を実施した。

遊戯室ホールに、次の写真5のように、幅1mで長さ15mの長大な和紙を広げた。5歳児約70人がパスをもってそれに絵を描いた。

- ① まず園児数人が和紙15mに線路と道と川をイメージした線をひかせた。さらに線路上に8枚の駅名を書いた紙を仮固定していった。駅名は、花の駅、水族館、動物園、遊園地、ショッピングモール駅、夜の駅など、園児が好み、加えて絵を描きやすいテーマを駅名に選んで設定した。
- ② 自分が気に入った駅に70人の園児を振り分け、駅名にちなんだ絵を一斉に表現していった(写真5)。途中一度、場所移動を行い、一人の園児が2箇所描画行為をするように指導を行った。約1時間半の間。



写真6 5歳児70人による15mの和紙の絵(部分)
上下向かい合わせに描いている

こうした事前の描画指導により、臨時的な指導者とのコミュニケーションを図るとともに、描画内容についても日頃描きなれたものから離れ一定のテーマに基づいて新たなものの表現に挑んでいくことを体験することによって、次の毛糸絵制作のため何を絵にするかの気持ちの準備とした。

毛糸絵の実践

35人クラスごとに導入(一斉指導)

- ① 毛糸玉を示しながら、マフラー、手袋、セータの素材が今回は絵を描く材料になることから話をした。

- ② 麻布と木枠および毛糸針を示しながらこれらを使ってこれから毛糸絵を作成することを伝えた。
- ③ 毛糸通しを図と実演を示して説明した後、園児数名をみんなの前で試してもらい理解を深めた。
- ④ 麻布を全員に配布し、まずパスで名前を大きめな字で書くように支持した。
- ⑤ 園児各自の名前がついた事物を連想しそれが絵として表わせるかを考えさせ、絵に描き表わせる園児はその表現に挑戦、できない園児は自分で考えたものを描くこととした。パスで麻布に直接描画を始める。
- ⑥ パスで描き終えた園児から順に木枠に麻布を固定(指導者が行った)。
- ⑦ 毛糸針と毛糸通しを渡し名前からステッチを開始した。
- ⑧ 名前からステッチに続き描画のステッチへと展開。
- ⑨ 一斉指導後は朝の当園直後やその他自由時間を使って各自が自主的に制作し完成(園教諭の指導)



写真7 毛糸絵の説明場面
木枠を組み立てる様子を見入る園児たち

写真7は、デモンストレーションとして1枠のみ組み立てみせることで作業へのモチベーションを高めることを意図した。園児の制作には直接関係しない部分であるが、自分達がこのあとで使う木枠を要領よく手早く作り出す行為をみせることは、ある種、物を作り出す大人への憧憬につながるのではなからうかとの発想があった。

毛糸通し具を使って毛糸を針に通すことに集中している



写真8 毛糸通しに挑戦中

毛糸通しは5歳児にとって仕組みを理解するにはやや時間が必要だった。毛糸と針と毛糸通し具も3つを手にもってコントロールする点で多少の器用さが求められるとともに、しくみを理解するのに初歩的な「知恵の輪」ともなっていて、完全に自らのものにするまでに個人差が大きかった。写真8のように、手の巧緻性や集中力を養うのには効果的と思われる。いったん出来るようになると、面倒な作業でも毛糸通しは楽しいことになっていった。



写真9 名前から刺繍する園児たち

写真9は、⑤の作業段階で各自の名前（ひらがな）からステッチすることを促した。ひらがな文字は比較的に絵よりは単純な線が多いとの判断から最初にステッチの基本を理解するのに適していること、また、この作業の後に絵を描くときの大きさについて、ステッチに適した大きさの絵（やや大きめ）を描く必然性を園児が知ることができるであろうとの意図があった。実際、この後での描いた絵が小さすぎる園児はごく少数であった。

ステッチの失敗事例

次の写真11と写真12は、刺した針を反対から返すことの基本を時々忘れてしまい、枠を超えて毛糸をひいた状態が見られる事例で、5歳園児には強い失敗感は無いうで、周りから指摘

され始めて気づくといったケースが多く見られた。修正は園児にはできない

との判断から、その都度、指導者の手によって直し、修正後に園児の理解を求め再開させた。

写真10の上部の毛糸だまりは十分に毛糸を引かないままでの事例。

写真11では、逆に強く引きすぎたために麻地を引っ張ってたるみを作っている事例で、こうしたケースはまれであったが起きている。



写真10 名前の刺繍がほぼ完成



写真10 毛糸が木枠をまたいだり、毛だまりができた事例



写真11 毛糸を強く引きすぎて下布にしわを作った事例

初めての針作業で十分理解できないまま作業にはいった園児たちも、多少の失敗は起きたものの飲み込みがよく失敗を通し逆におもしろさが増したかのように熱中する姿がみられた。ステッチの美しさにこだわる園児の作品は周囲の園児への刺激になって、全体的にどんどん上達していった。

実践時やその後の制作の様子について

直接の指導は一度の2時間程度の間であった。その後については幼稚園の教諭の指導によった。その様子について、次に園発行の通信の記事内容を掲載し、制作の園児の取り組みの姿や作品の取り扱いを紹介する。

糸貫西幼稚園 10月の実践より「11月ねんちょう ちびっこだよりの」記事

トミー先生と遊んだよ! ~自分だけの作品づくりから~

先日、トミー先生(富岡先生)と造形遊びの中で刺繍遊びを体験しました。まずは、布に自分の名前を書き、自分の名前から連想されるものの絵を描いたり、自分の描きたいものを描いたりしました。その後、刺繍について話を聞き、初めて毛糸のかがり針(毛糸針)をもって名前から毛糸を使って刺繍をしていきました。「僕、お家で雑巾縫ったことあるよ」と、経験ある子は抵抗がなく始めていきました。初めて針を持つ子は、トミー先生や周りの子に「どうやってやるの?」と聞きながら、「針は少しずつまえに進めていくなだよ。Bさんは何色でやりたい?」など教え合って、初めての経験を楽しむ姿がありました。「針なんて大丈夫かな」と思っていたが意外と子供たちは扱い方にも気をつけてうまく進めていくことができました。この遊びから子供たちはイメージを毛糸で絵にすることの面白さに気づき、友だち同士で楽しみ、集中して取り組む力にもつながっていくと考えます。朝、登園するとすぐに「昨日の続きをやっていい?」と聞く子供の姿に「初めての刺繍での作品作りへの意欲」が感じられます。この作品は文化祭に出展します。子ども達の一針一針縫った作品を是非見に来てください。

この記事の中で、刺繍という言葉を使っていて毛糸絵との違いについてはまとめて述べるこ

とにする。

『「針なんて大丈夫かな」と思っていたが』とあるように、経験豊富な園の教諭にとっても幼児期の表現教材として目新しいことと認識されていることを示している。しかし、実施結果として、特に怪我をすることもなく園児が楽しんで『「作品作りへの意欲」が感じられます』という表現でこの試みを評価している。



写真12-1 地域の文化祭に展示された毛糸絵



写真12-2 展示作品の案内表示

展示中に鑑賞にきた人から「5歳児で針を使うなんてすごいね」といった驚きの感想がきかれた。

このように、一般的にこの年齢の時期の針を使わせることの抵抗感があることがわかる。一方で、こうした実践作品や作業風景の写真資料をみることで、実際には低年齢であっても大丈夫なのだということの理解が広がることを期待する。あまりにも安全優先の考えから、子ども達から手道具を遠ざけ、ものを創造する原点を失いつつあることに気づいていただきたい。

総合的な表現教材への研究の試み

今回は、実践1とは異なる要素を加えた。そのひとつが絵柄付の布地の裏に和紙をのり貼りしアイロンをかけたものを多数準備した。各園児が必要に応じて形に切ってボンドで毛糸絵に加えることができるようにした。のり貼りによるある種パッチワークがイメージされる。



写真13-1 女児の総合的要素を含んだ作品
毛糸ステッチの輪郭線のほか、パッチワークとパスで顔、髪、服の模様などに多用。総合技法の作品例



写真13-2 男児の総合的要素を含んだ作品
毛糸ステッチの輪郭線のほか、上のさかなはパッチワーク

毛糸によるステッチは線描風になるのに加えて、布張りが面で表わされることに着目したもので、さらに「パスで面ぬりすることもよいよ」という助言をしてすすめた。

染色技法でいうところの「辻が花染め」のようなもので、刺繍とパッチワークとパスの描画をミックスした総合技法ということもできる。

写真13-1, 13-2で見られるように毛糸の刺繍を補足し、絵として密度が高まり豊かな画面になっていることがわかる。

こうした表現技法の適した年齢として、5歳児からの2,3年間(小学校1,2年生)が考えられる。



写真14-1 男児の毛糸絵

毛糸刺繍中心に文字とカブトムシなどを多色の毛糸で表現している。絵の形が小さかったが雰囲気は表現できた



写真14-2 男児の毛糸絵

何の形かはっきりしないが、ステッチの方向が他の作品とことなっていて線路上の電車を表現しているのだろうか

写真14-1, 14-2は, 男児の作品で, 形の途中から色糸を別の色にかえているが, 毛糸通しがもたらす効果が考えられる。

実践2のまとめ

ねらいのひとつとして, 幼稚園の造形教材の開発にあったが, 十分に有効性が実証できた。それは次の点においていえる。

- ① 導入段階から, 5歳児が強い興味関心をもって課題理解をしようと積極的な態度がみられた。
- ② 針と毛糸あるいは毛糸通し具を経験を重ねることにより見る見る上達して使いこなした。完成までの長い時間を飽きることなく持続するとともに, 自主的に作業を進めることを担任教諭に求めたり積極的に取り組んだ。
- ③ 仕上がった作品が他に例がないくらい密度のある独自性ある造形作品となった。個々の作品に園児各自の能力を超えるような豊かさが発揮されている。

ふたつめのねらい, 手の巧緻性の発達を促す教材となり得るかについては, 針や毛糸通し具の使用, 木杵を抱えての作業をいうことから十分に発達を促す内容であったと判断できる。(I, II実践報告文責 富岡卓博)

III 実践報告3

1 実践の方法と目的

鉄道に興味のある子どもが中心となる実践

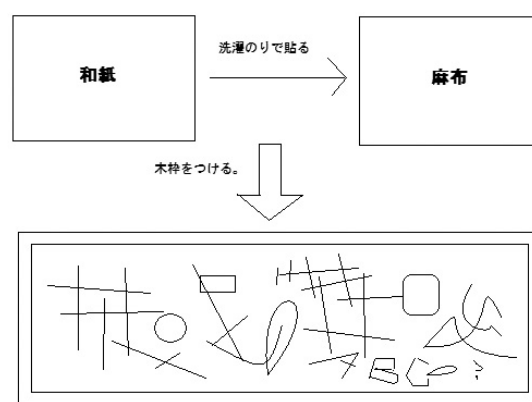
自閉的傾向のある子どものなかには, 鉄道に興味のある子がいる。岐阜大学教育学部附属小学校の特別支援学級では2人の男の子が鉄道に興味をもっている。なかでも, E君は直線で線路図を描くことが好きである。この子どもが中心となって作品をつくる教材を考えてみた。それが, 麻布に和紙を貼ったものに, 簡単な刺繍をして作品化するというものだ(図J-3参照)。まず, 和紙の面に自由に子どもたちに絵を描いてもらう。そして, 今度はその絵の上から刺繍をするのだ。しかし, それほど細かく規定はせず, のびのびと子どもたちに活動してもらうことが前提である。最初に描いた絵をそのまま残してもよいし, 絵を飾るように, 絵とは違うところに刺繍してもよい。また, 和紙という素材を使用しているので, 水彩絵の具でところどころ着色したり, にじみをつくったりすることもできる。路線図を描く子どもが中心となる理由

は, ひとつは, 路線図が直線的であるために刺繍がしやすいからである。もうひとつの理由は, 路線図を描く子どもにほんの少し負荷を与えてさらなるステップアップを図ろうというものである。

(1) 対象者と指導者および実施時

- ・対象者：附属小学校特別支援学級高学年クラス, 男児4名, 女児2名 計6名。
- ・指導者：新井萌, 同校教諭
- ・実施期：平成19年9月10日と20日の2回

(2) 実践方法



まずは, ひとりずつ刺繍というものに慣れてもらうことから進めていく。大きさも, 子どもたちの扱いやすい大きさのものから慣らしていくことが必要であると考え。実際に2回の授業を行った。

2 展開の様子

第1回目も第2回目もA4程度の大きさの木杵に, 麻布と和紙を貼り合わせたものをつけたものを, あらかじめ用意しておいた。第1回目は, 和紙の部分に好きなように簡単な形を描いてもらい, その後, 針と糸で刺繍をしてもらった。刺繍の仕方については, 個別で教えるようにした。一度やり方がわかれば, 子どもたちも進んで刺繍をするようになった(写真15-1, 15-2参照)。どこに針を刺したらよいのかわからない子どもに対しては, 針を刺すところにマジック等で点を打つようにした。そうすれば, 針を刺す位置に戸惑っていた子どもたちも刺繍することができた。反省点としては, 麻布の目が少々細かく, 針を刺すのに力が要ったこと, 普通の刺繍針は子どもにとって扱いにくかったことである。



写真15-1 刺繍に取り組むA子

絵などを自由に発展させていく女の子。四角の輪郭を刺繍するのではなく、四角の中を色塗るようにし刺繍している。非常に集中して取り組んでいた



写真15-2 刺繍に取り組むB男

水自体や水色が好きな男の子。口数が少なく、人見知り強い。



写真16-1 A子の作品

- 三角や四角などの幾何学形を下描きした
- 赤、ピンク、オレンジの糸を使用
- 画面の上の方や左の方を刺繍している

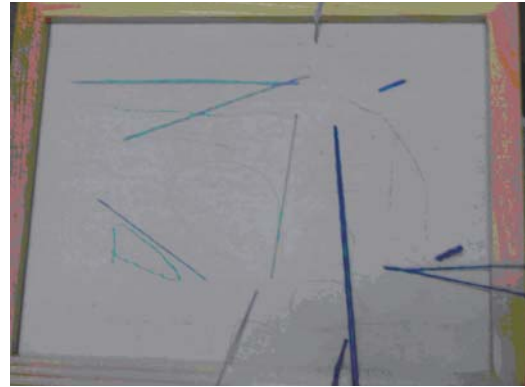


写真16-2 B男の作品

- 木の枠の方に糸を出している。
- 下描きの線は水色、水色、青の糸を使用。
- 画面いっぱい使っている。



写真16-3 C男の作品

- ぐるぐる描きやます目などをなぞることが得意な男の子。
- 下描きにぐるぐる描きを描いている。
- オレンジ色の下描きを、ピンクの糸でなぞるように刺繍。
- 画面いっぱい使っている。
- 適切な指導があれば、刺繍ができる

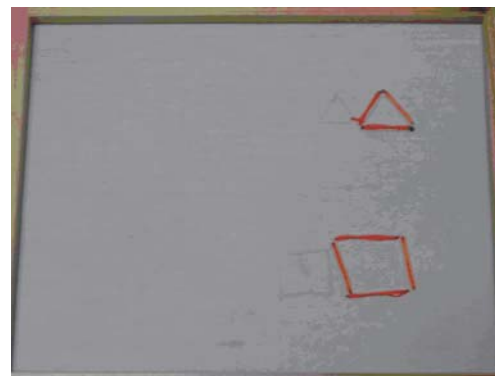


写真16-4 D子の作品

- 明るい色が好きな女の子
- 適切な指導があれば、刺繍ができる
- どこに針を通せばよいのかがわかれば、刺繍ができる
- オレンジの糸を使用
- 画面の右の方を刺繍している

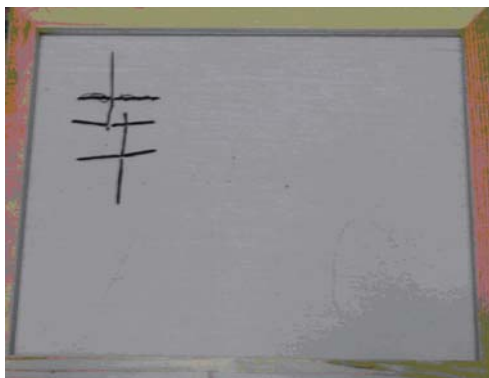


写真16-5 E男の作品

- ・線路図を描くのが得意な男の子。この企画の中心人物
- ・黒の糸を使用
- ・左の方を刺繍している
- ・丁寧に刺繍したが
- ・要領は大体わかっている様子

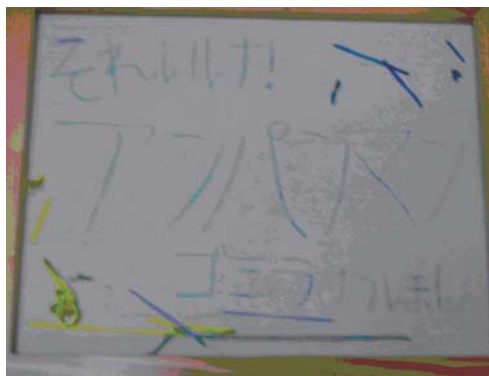


写真16-6 F男の作品

- ・文字を書いている。
- ・水色, 青, 黄の糸を使用
- ・文字をなぞるように刺繍するのではなく, 文字の周りを飾るように刺繍

第1回の内容を復習してもらおうこと, そして保護者の方に子どもの取り組みを見てもらうことを目的に, 第1回と同じ内容を課題作品にした(写真17-1, 17-2, 17-3の課題作品参照)。

そうしたところ, 保護者の方から次のような反響を得ることができた。

- ・「針を使わせるのは危ないと思っていたが, 意外にできることを知った。可能性が広がった。」
- ・「自分の子どもの作品を見て, その作品のユニークさから, 子どもの新しい才能を発見した。」
- ・「刺繍に熱心に取り組む子どもの姿を見て, 将来的に仕事にできるか, もしくはいい趣味になると思う。」

・「刺繍を丁寧にする子どもを見て, 刺繍がむいていると思った。」

・「今後もやらせてみたい。」

また, 先生方からも「この大きさでも十分作品になるから, 是非とも学校に飾りたい。」というコメントをいただいた。

親や先生方にとっても, 子ども自身にとっても, 新しい才能を発見したり, 可能性が広がったりするよいきっかけになったのではないかと思う。

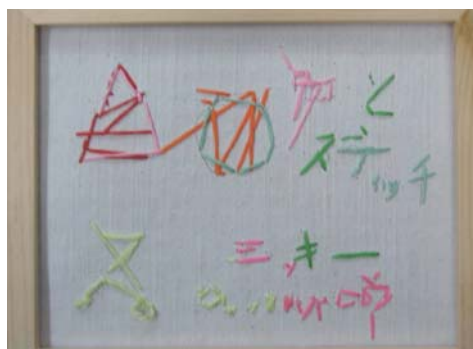


写真17-1 A子の課題作品

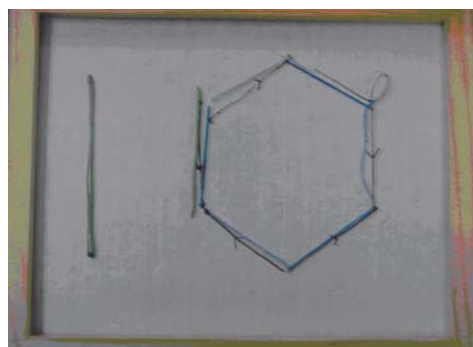


写真17-2 B男の課題作品

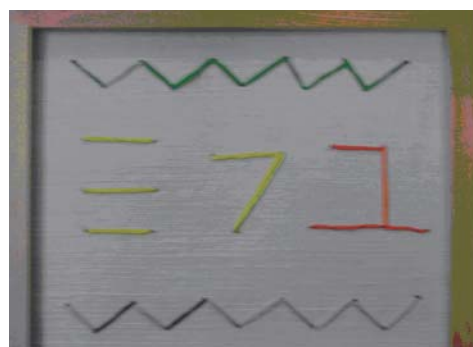


写真17-3 D子の課題作

第2回目は, 和紙の部分に好きなように点を打ち, 点と点を糸でつなぐように刺繍する, ということを行った(写真18, 19を参照)。前回

の反省も踏まえて、麻布の目は粗めのものにした。また、針も普通の刺繍針に比べて大きく扱いやすい畳針を用意した。目の粗い麻布ならば畳針のような太目の針でも通る。実際私もやってみたが、第1回より力も要らないし楽に刺繍できるようになった。子どもたちも刺繍しやすそうであった。今回の反省点は、針の小ささであった。子どもたちは、針に糸を通すことと、最初の玉止めができない。



写真18 和紙に好きに点をうっているところ

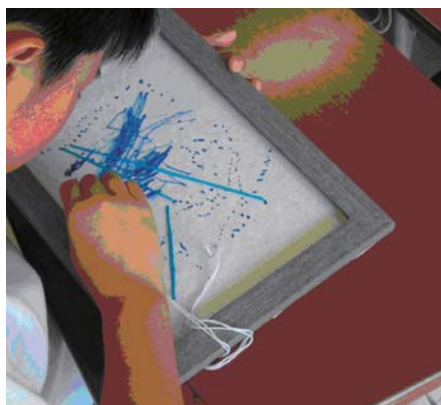


写真19 点と点を好きにつなぎ刺繍する

このため指導者が針に糸を通し、玉止めをする。しかし、その間子どもは手持ち無沙汰の状態で待っていないといけないのである。この状態を改善するには、何本か針を用意しておく必要がある。何本かある針に予め様々な色の糸を通しておき、子どもたちに好きな色の糸を選んでもらうのである。そうすれば、子どもたちは好きな色の糸の通った針を選んで、すぐに縫い始めることができる。この反省から、次回は何本か用意するようにしたい。ちなみにこの実践は第3回までの計画であり、次回はいよいよ大きな作品をつくる予定だ。



写真20-1 A子の作品

- ・非常に細かい
- ・左端の方から少しずつ刺繍している
- ・すぐに隣り合った点を結んでいる
- ・画面いっぱいに点を打っている
- ・赤やピンクの糸を使用

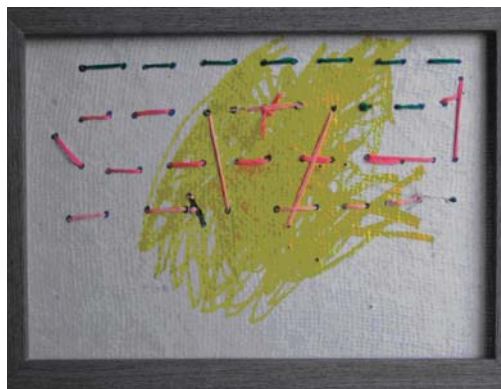


写真20-2 C男の作品

- ・主に隣り合った点を結んでいる
- ・ぐるぐる描きのようなものを下描きを描いている
- ・点は先生の支援による
- ・下描きは黄色、糸は緑とピンク系である
- ・デザイン的な印象を受ける
- ・途中、糸が絡まり軽いパニックになったが、糸の色を変えると再び集中した



写真20-3 D子の作品

- ・いろいろな方向へ糸を伸ばして刺繍している
- ・のびのびとした印象を受ける。きれいな色が好き
- ・色は様々なものを使用
- ・要領がわかっている様子だった

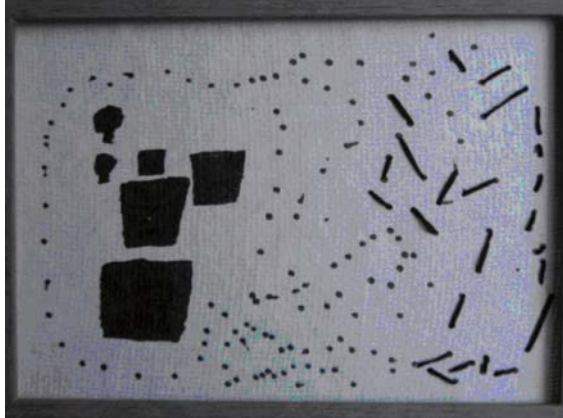


写真20-4 E男の作品

- ・細かい
- ・右の端の方から丁寧に進めていく
- ・下描きは画面いっぱいを使用
- ・黒い糸を使用
- ・随分と要領がわかっている様子



写真20-6 F男の作品

- ・点というよりは短めの線を引いたようだ
- ・線とは関係ないところに刺繍している
- ・青いペンで下描きしている
- ・水色、白、赤の糸を使用
- ・画面いっぱい使用している



写真20-5 B男の作品

- ・離れた点を結んでいる
- ・木枠の外へ向けて、糸を出している
- ・青いペンで下描きしている
- ・画面の真ん中辺りを使っている
- ・水色、緑、白の糸を使用

A子は赤系の色を好み、E男は黒を好み、F男とB男は青系の色を好むということが2回の実践から伺える。また、F男の作品(写真20-6)はいつも木枠の外へ向けて刺繍されていて面白い。現代アートのような印象も受ける。A子の作品(写真20-6)とか、C男の作品(写真20-2)、E男の作品(写真20-4)はまめな印象を受ける。それに対し、D子の作品(写真20-3)、B男の作品(写真20-5)F男の作品(写真20-6)は大胆な印象を受ける。

同じ教材に取り組んでも、個人によってまっ

たく違う作品となる。刺繍として模様をつくりたい子どももいれば、自分の絵柄を飾るものとして刺繍をする子どももいる。それぞれの持ち味を大切にしていきたいものである。今回の実践では、どの子どもも静かに集中して刺繍に取り組んでいた。私自身、最初は子どもたちが針を扱うのは危ないのではないかと心配していたが、実践によってこちらが思っている以上に子どもたちは色々なことができることを知った。

意外にも、こちらの知らないところで子どもたちの才能が眠っていることがある。何事もやってみないとわからない。様々なことをさせてみたり、今こだわっていることにほんの少し負荷を加えてみたりすると、今までできないと思っていたことができるということを知る。そうすれば、子どもたちの可能性は広がっていくし、場合によっては才能発見にもなる。最終的には、自閉的傾向のある子どもをもつ親御さんにとっても、また本人にとっても自信につながっていくのである。この実践において、最初から、これはできないだろうと決め付けてはいけないことを改めて実感した。

実践3のまとめ

刺繍遊びによる授業は、次のような成果が得られた。

- ① はじめのうちは、刺繍の仕方が分からず戸惑う子どもの姿が見られたが、徐々に刺繍の仕

方を理解し、自ら進んで刺繍するようになった。
(主体性の育ち)

② 授業は刺繍遊びという題目で行われたが、一般的に考えられる刺繍という観念よりも広い観念で捉えて授業に当たった。子どもたちの作品を見ると、ただ自分の描いた線の上を糸でなぞるのみならず、描線を飾るかのように刺繍したり、思うままにダイナミックに刺繍したりしている。家庭科で習うような刺繍ではなく、美術の作品としての刺繍が見て取れる。(着想の自由性)

③ 子どもが興味をもっていたものに少し負荷を加えてみると、今までできないと思っていたことができることを知る。それは、子ども自身にとっても、親にとっても自信につながると考えられる。(課題理解と目的の達成)

(Ⅲ実践報告文責 新井萌)

IV ユダヤ人女子の毛糸絵の分析

写真24についての分析と考察

本研究と教育実践のきっかけとなったユダヤ人女子の毛糸絵をよく見ると、単純な刺し子風(ランニングステッチという)のステッチではなく、多種多様かつ高度なステッチ(縫い方)の技法が駆使されていることが分かった。また、紙上での刺繍は針の入りと出が刺し穴周りの凹凸の痕跡があることから、ステッチの進行までがある程度読み取れるという思わぬ結果を作品上に遺している。

こうしたことを含め詳細に分析することで、今日の子どもたちのための造形教材として毛糸絵を考えた場合、ステッチにどのような描画効果があるのか、発達段階からみてどの年齢あるいは学年に応じた表現方法としてのステッチを教えればよいか、またどのような表現内容が可能であるかを探ることができると思う。

ユダヤ人女子が遺した毛糸絵の資料は写真1(作者1932年8月生12歳女兒)と写真24(作者1932年5月生12歳女兒)でいずれもテレジンの収容所においてこの作品を描いたとされる。

ここでは写真24についてのみ作品写真から可能な分析を試みることにする。

1 制作過程の分析

この作品の制作は次の3過程と考えられる。

過程① 線の表現のステッチ手法

罫線の引かれた薄手の紙の端切れに、鉛筆で下書き後にステッチされた部分(左側の花には鉛筆で下書きが施されている)と、下書きなしでステッチされた部分が見受けられる。このことから、誰か指導者が側にいて、手習い用のサンプルを示すなどの指導を受けながら刺繍し、あとは自由にあるだけの糸で同じモチーフを繰り返した結果の表現とも推することもできる。事実、子どもの教育のため若い教師がゲッターに送り込まれたとされる。

ともかく、刺繍された毛糸の下に鉛筆で描いた線が部分的に遺されている。

過程② 水彩絵の具による表現

過程①において線で表現された花びらの内部と花卉部分を、水彩絵の具で極薄く彩色をしてある(ほんの部分的な彩色)。その色を表す糸が手元になく、代替としてそうしたのか、立体的な刺繍と平面的な水彩絵の具と対比させた表現としてそうしたのかは不明である。しかし、この組み合わせによって、単純に手芸としての刺繍の枠を超えて作り手の豊かな個性的表現になっている。

過程③ 面の表現のステッチ手法

植木鉢の下には、花の株の根元部分と葉の部分が隠れている。よって植木鉢部分は根元を塗りつぶすようにして、あとから付け足して刺繍された表現であることが伺える。

同じように線の表現で刺繍された花びらの上に重ねるように、別の毛糸で刺繍されている部分も同様である。

日本の5歳から7歳くらいの子どもの描画過程でも、例えば、棒立ちの人物を肌色で全身を描いたのち重ね塗りで洋服を描き加えるというように、児童期特有の形の重ね描き表現の方法がある。この場合もこれにあたるのか他に理由があるのかははっきりしないが、いずれにしても結果として重厚さが作出されている。

この作品では3箇所線から面の表現のステッチがみられる。そのうちの右上は花にとまる白い蝶を面表現で表わそうとしているように見える。

2 描画におけるステッチの効果

制作過程の中で登場するステッチは、作品中に7種類使用されている。それぞれのステッチには役割が存在し、それは美術における描画の

3つの要素と共通している。

その要素とは、①線による効果、②動きや変化をつける効果、③面の効果である。

① 線による効果

対象の表情や、シルエット、アウトラインを描くときに、線の表現を基準としたステッチを用いる。通常の刺し縫いであるランニングステッチは運針の基本に当たる。

作品内における線の表現の例は、①バックステッチ、②チェーンステッチ、⑥コーチングステッチがこれにあたる。

② 動きや変化をつける効果

次に、対象の動きや変化をつけるときに、線の表現を持つステッチに方向性をつけその効果を持たせる。糸を交差させるように縫うクロスステッチ（十字縫い）のほかに、作品内における例では④アローヘッドステッチ⑤ブランケットステッチがこれに当たる。

③ 面の効果

そして、輪郭線や線の表現の内部を埋めるために、面の表現の効果を持つステッチを用いる。

線の表現である②チェーンステッチや、動きを出す表現である④アローヘッドステッチなどを、縫い目の間隔を詰め、規則性を持たせてステッチすることで、びっしりと目の詰まった面の表現が可能である。

作品内における例の③ボタンホールフィリングステッチや⑦乱れ刺しなどは、適当に隙間が出来て、柔らかくあたたかい感じの面の表現となる。

3 用紙の分析

白い紙にはクレヨンや水彩絵の具で描画が施してあり、罫線や機械の設計図の裏紙には切り絵や刺繍が施してある。ここでは次の2点が挙げられ、そこからこのユダヤ人女子の制作時の年齢を読み取ることが出来た。

① 用紙の使い分け

子どもたちの意識の中では白い用紙に対して、無限の空間の広がりを感じていたに違いない。罫線紙の裏紙は工作用紙として使いわけて、「特別なもの」として扱っていたのではないだろうか。

日本でも3歳児がカレンダーや広告の裏紙でも気にせずにごんごん描く。だが写真24を含む参考文献に掲載された作品を見る限り、その

傾向は見受けられない。

② 紙に刺繍をすることの難しさ

紙に刺繍されたこの作品からは、針を通す際に来る凹凸がそのまま残されている。ここからステッチの方向性を読み取ることが出来る。また用紙の表の作品部分のみならず、裏側の状態がどのようになっているのかまで予測できるようだ。

通常、刺繍は布に施す。布を枠に固定することで張りを持たせ、固定された状態に針を使って糸を布に通していく。

だがこの場合、おそらく枠などは使用しておらず、紙を直接手で持ち、紙が縫れないように力加減をしながら、刺繍を施したと思われる。この力加減は相当高い難度と思われる。そうした糸の引っ張り加減や豊かなステッチ技術は、収容される前の経験、すなわち布地への本格的な刺繍の豊かな経験と知識があってはじめてできたことかもしれない。

4 作品におけるテーマ性とその背景分析

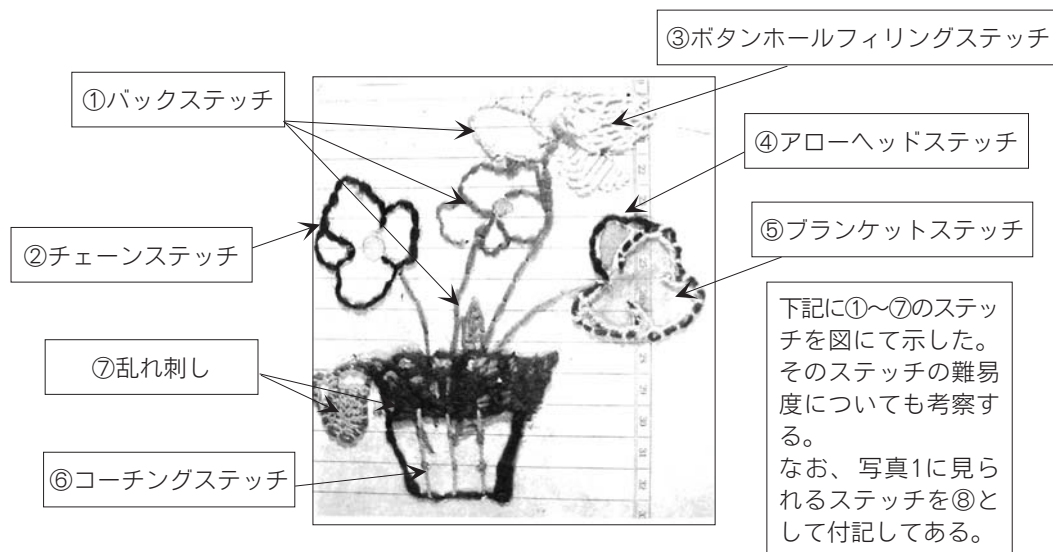
参考文献2冊の一連の作品には、花をテーマにした作品が8点が含まれているが、その中のなんと7枚には蝶と組み合わせて描かれていた。このことから写真24の右上部の白い毛糸の形も蝶と推察される。子どもたちにとっての「蝶」は何か特別な意味や象徴としての思いをこめて描いていたのであろうか。

チェーンステッチやランニングステッチで施された花の部分に覆いかぶさるように③ボタンホールフィリングステッチと④アローステッチで施された部分は、明らかにそれまでの表現とは異質なものである。よってこの部分は蝶をかたどったものと捉えてよいであろう。また写真24の左下にある乱れ刺しによる表現部分は、これから大きく花びらを開かせるかのようにその重みでうなだれたつぼみに見える。

ステッチの詳細

- ① バックステッチ・・・返し縫いで、縫い目の進む方向と反対の方向に同じ感覚で糸を縫う。輪郭線などによく使われるステッチ。
- ② チェーンステッチ・・・縫い糸が鎖の目を表す基礎となる刺し方。鎖縫いのこと。輪郭線や面を埋めるときに使われる。輪の大きさがそろって美しい。
- ③ ボタンホールフィリングステッチ・・・ボ

使用されているステッチの種類



① バックステッチ→易しい。5歳児の実践作品にも施されている。

⑤ ブランケットステッチ→難しい。一区分が縦と横のつながりで成り立つため理解しづらい。中学年?可能

② チェーンステッチ→比較的難しい。均等な縫い目を施すのであれば低学年後半頃から可能

⑥ コーチングステッチ→易しい。縫い目の数が少ないので理解しやすい。低学年前後から可能

③ ボタンホールフィリングステッチ→難しい。上記作品は12歳の少女の制作だが縫い目がいびつである。

⑦ 乱れ刺し→易しい。ざくざくと好きなように針をうごかすことを楽しめるので低学年前後から可能。

④ アローヘッドステッチ→比較的易しい。①のステッチの変則であるので低学年でも可能。

⑧ フェザーステッチ→難しい。左右上下の間隔をバランスよくとることを要求される。高学年頃から可能。

タン穴を作るときに使う、針目の間隔を詰めてきっちりと刺し、あとで針目に添って布地をカットするボタンホールステッチを重ねて段組みをすることで面を作る刺し方のこと。

- ④ アローヘッドステッチ・・・アローヘッドとは矢羽根のこと。ストレートステッチの要領で左右交互に矢羽根の形になるよう刺す。何列かに並べて面の表現にも使う。
- ⑤ ブランケットステッチ・・・ボタンホールステッチの間隔をあけて粗く刺すステッチ。昔の毛布やタオルケットの縁回りをこのステッチで処理されていたことからこの名がついたといわれる。
- ⑥ コーティングステッチ・・・太めの糸を布の表面の模様添って置き、別の細めの糸で目立たないように留め付ける。線の表現、面の充填に用いる。
- ⑦ 乱れ刺し・・・ランダムに糸と糸が重なりあうように刺す。面を埋めるときに使用する。

このユダヤ人女兒が作品を制作した場所であるテレジンとは、当時のチェコスロバキア、プラハの北60kmにつくられたゲットーおよび強制収容所のことである。西ヨーロッパからテレジンに送られてきたユダヤ人の中には、多くの有名な画家や作家、音楽家たちも含まれていた。彼らは"先生"となって、すさんでいく生活に慣れきってしまい、笑顔を忘れてしまった子ども達のところを救うべく、こっそり子どもたちに授業を行っていた。

空腹ときびしい労働で疲れはてた子どもたちのたったひとつの楽しみは、ひそかに絵をかくことであり、遊園地やサーカスの思い出、花や蝶、子どもたちは何でも絵にした。

幸せの記憶の中を自由に飛び回る蝶や虫たちにやがて大輪の花が開くであろうつぼみ。これは悲惨な生活からの開放、自由への憧れや希望を象徴している。

だが彼らの目の前の現実は残酷であった。ここには14万4000人のユダヤ人が収容され、そのなかには1万5000人もの子どもたちがいた。3万3000人が飢えと病気でこの町で死亡し、さらに8万8000人がアウシュヴィッツのガス室へ送られた。そして解放時に生存していた子どもはわずか100人。そして約4000点の絵や詩が残骸の中から見つけられ残された。

5 考察

ヨーロッパ刺繍のステッチはとても豊富で、100種類以上あるといわれ、色とりどりの糸の組み合わせとステッチの使い方で、繊細なものからラフなものまで、変化にとんだ美しい作品ができる。

男性たちは木工や力仕事を男児に伝え、女性たちは日々の家事や農耕の合間をぬって、さまざまなステッチを女兒に伝えてきたのである。その家の働き手が不在であれば、残された祖父母が孫に伝える。そのように脈々と時代を超えて受け継がれ、文化として育まれた結果、今日がある。

この作品は、ナチス支配下のドイツにおいて迫害されたユダヤ人が強制移住先(ゲットー)での生活の中で残した作品である。

その後の彼らがどのような運命をたどったかは様々な記録が示す通り、常に「死」と背中合わせの運命であったといわれる。

この作品についても一度に完成させたものではなく、少しずつ手にいれたわずかながらの材料(毛糸)で、時には自分たちの着ている衣服から取り出したりし、おとなが子どもに寄り添って、厳しい監視の目をかいくぐり制作したものである。

生活環境としては最低限以下に切り詰められたゲットーの中でさえも、そこにいる人々は自分たちの先祖から受け継いできた知恵・知識を子どもたちに伝えていくことで、苦境の先に、民族の誇りや生きる希望をみいだしたのではなかろうか。

この作品からは未来への暖かいまなざしが伝わってくる。

6 IVのまとめ

技術的な基本は、線の表現のステッチであり、その応用として面の表現のステッチにつながる。先の保育園・特別支援学級での実践において、普段の描画表現と同じく、線の表現であるステッチから制作に入っていく手順は発達段階からみてもごく自然なことと言える。次のレベルの展開としてステッチによる面の表現については、身体的・技能的に追いつかない子どもが多かった。だが、日本の伝統的染色技法である「辻が花絞り」のように多種の技法が総合されているといった例を挙げるまでもなく、発展途上の子

どもの能力型見て、子どもたちがこれまで経験しているクレパスで色を塗ったり布をはさみで切って貼付けるといったこと、つまり同一画面上で「なんでもあり」といった表現方法は全く不自然なことではない。むしろ、子どもが好んで出来るならこちらの方がかえって画面を豊かにし、個人のオリジナリティーを生み出す結果となる。ここで分析したユダヤの女兒作品にも、刺繍の他に鉛筆、水彩が用いられていた。

また、針と糸をわれわれの予想以上に使いこなせたことから、新たな挑戦として、ステッチの方法を、年齢に応じて段階的に与えていくことで、知能的にも身体的にも刺激となり、これからの造形活動を活発に展開し、より豊かなものにしていくことが期待できる。

(IVステッチ分析文責 堀 祥子)

V 本論のまとめ

毛糸による刺繍ということでは生活陶冶としての工芸、あるいは教科からみれば家庭科の領域といえる。しかし、本研究のきっかけとして前掲のユダヤ人女兒の作例は絵画的扱いで毛糸を描画材として扱っている。すなわち自己表現(いわゆる純粹表現)の手法で扱っている点で美術教育の教材としての有効性を検討する価値があると考えた。

日本の伝統工芸でもある「辻が花染め」が複数の技法をもっているように、発達途上の幼児期の作品(特に写真13-1などは顕著)の場合では1技法では未熟なため複数の表現方法を相補的に用いることによって画面を豊かにしている。

実践1では5歳児の共同作業の発達状況の検証をこころみたが、図1のように裏側にいて他者のために自主的に奉仕することは当初困難であった。授業者である筆者がその役割を代替して「いくわよ」と女性風に声かけして針を刺し返す言動のおもしろさを見てその模倣を始めることで多数がその役割につくようになった。このことから、他者のために何か奉仕すること(気持ちのよさ)は既に育っていることがわかった。

実践2では5歳児が一人で毛糸と針を用いて刺繍技法で描画活動することが特に危険でなく、技法的な課題理解をクリアしながら十分に楽しくできるということが分かった。個人制作の作

品として個々の作品に違いがあっても高い質の表現となっている。

実践3の特別支援学級での実践において、活動結果の保護者の感想にもあるように、児童の内在している能力の発見があり、今後の児童への大きな期待を導くような結果を得ている。

本論の中で、「毛糸刺繍」と「毛糸絵」の語の使用が混在しているが、「毛糸絵」の概念の方は一般的に広く用いられていない。「毛糸絵」は「毛糸で絵を描く」活動として、「毛糸を単に置く、並べるなどして飾る」、「毛糸をのりやボンドで貼り飾る、絵にする」といった行為も表現の原初的な活動として位置づけし、針を用いる本格的な刺繍をその発展として考えることによる。そこに造形教材の視点を置くことで、自由で斬新な教材開発の可能性を拓こうとする考えによっている。そうした意味で「毛糸絵」の語を使用している。本論の実践報告はいずれも針を用いた刺繍行為であるが、そのねらいは描画的な自由な使用としてあえて「毛糸絵」と表現している。

以上のことから、「毛糸絵」が今日の幼児教育の表現教材や小学校図工科教材として十分に有効であると考えられる。

参考文献

- 『テレジン収容所の小さな画家たち詩人たち』野村路子編著1997.6 ルック
- Dessins d'enfant du camp de concentration de Terezin出版年等不明
- ヴォーグ基礎シリーズ 新・刺しゅう1991.5 日本ヴォーグ社



写真21 壁画として飾られた5歳児の毛糸絵

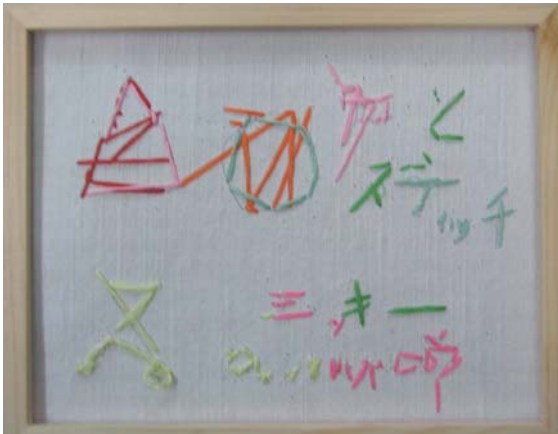


写真17-1 (再掲) A子の課題作品



写真22 女児の毛糸絵作品「お花を持つ私」



写真23 女児の毛糸絵作品「お魚とメロン」

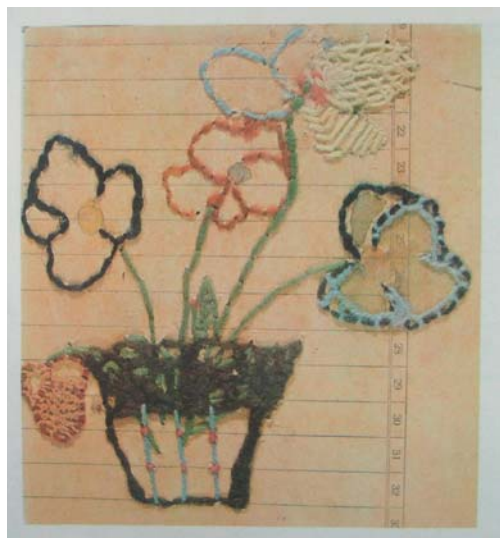


写真24 ユダヤの女子の毛糸を用いた絵